“いま”のAMEDを伝える：医療イノベーション創出への道を拓く

AMED Pickup

March
2022

AMED「社会共創」への取り組み

国立研究開発法人 日本医療研究開発機構
Japan Agency for Medical Research and Development

AMED「社会共創」への取り組み

AMEDは、2021年10月1日付で「研究公正・社会共創課」を設置し、「社会共創（Social Co-Creation）」の取り組みとして、①医療研究開発にともない生じる倫理的・法的・社会的課題（ELSI*）への対応、②多様な幸せ（well-being）を実現するためのダイバーシティ推進、③Society 5.0における医療研究開発のための持続可能な開発目標（SDGs）への対応を、組織として推進しています。

＊ELSI:Ethical, Legal and Social Issues（倫理的・法的・社会的課題）の略

社会との対話や協働を通じて、社会の真のニーズを満たす成果を一刻も早く実用化し、患者さんやご家族の元にお届けする

AMED理事長　三島 良直

2015年4月に発足したAMEDは、「成果を一刻も早く実用化し、患者さんやご家族の元にお届けすること」を目指し、医療分野における基礎から実用化までの一貫した研究開発の推進と成果の実用化に向けた取り組みを行っています。

AMEDが取り扱う主な疾患分野（がん、生活習慣病、精神・神経疾患、老年医学・認知症、難病、成育、感染症等）は、いずれも現在および将来、日本において社会課題となるものであり、国民の安全・安心を確保しつつ、社会から理解・信頼を得ながら実用化を進めることが必要な研究開発テーマばかりです。このことからも、医療研究開発にともない生じる倫理的・法的・社会的課題（ELSI）への対応を、今後さらに注力していく必要があると考えています。

また、医療分野の研究開発はもはや医学・薬学に留まらず、他の自然科学や、社会科学・人文科学も含めた幅広い学問分野を背景に進められるべきであり、「第6期科学技術・イノベーション基本計画」が示すとおり「総合知」の活用が求められます。一方、医療分野の研究開発における「総合知」には、患者さんなどが有する「知」も含まれる必要があることは、国際的な動向からも明らかです。そのために必要な「研究への患者・市民参画（PPI＊）」の取り組みについてもAMEDはリーダーシップを発揮し、多様な幸せや価値を実現するためのダイバーシティ推進にも尽力いたします。

さらに、持続可能な開発目標（SDGs）も考慮しながら、AMED全体で、社会の真のニーズを満たす成果を、社会との対話や協働を通じて“共に創る”ことで、Society 5.0実現など社会への貢献を着実に果たしてまいります。

＊PPI:Patient and Public Involvement（患者・市民参画）の略

2020年度感染症研究開発ELSIプログラム

AMEDは、COVID-19に関する診断法や治療法、ワクチンや医療機器などに関する研究開発を幅広く推進しています。

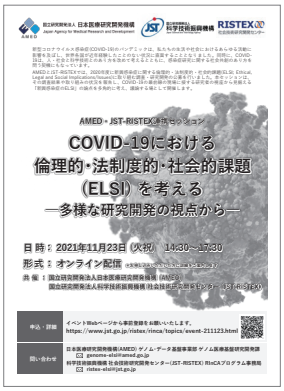
2020年度感染症研究開発ELSIプログラムでは、①感染症の研究開発に資する倫理的・法的・社会的課題（ELSI）、②感染症流行時の適切な情報発信に資するリスクコミュニケーションに関する調査を計4課題実施しました。約8ヵ月という短い期間のプログラムではありましたが、感染症の医療研究開発に役立つ知識や技術などの創出につながる、重要な調査結果の数々を得ることができました。

なお、2020年度感染症研究開発ELSIプログラムの調査結果を社会に広く還元すべく、AMEDと国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）社会技術研究開発センター（RISTEX）が連携して、オンラインセッション「COVID-19における倫理的・法制度的・社会的課題（ELSI）を考える～多様な研究開発の視点から～」を2021年11月23日に開催しました。本セッションでは、両機構における調査や取り組みの状況が報告され、COVID-19の最前線の現場に接する研究者の視座から見据える「新興感染症のELSI」の論点を多角的に議論する場として、研究者や関係者、メディアや行政機関の方、そして一般市民の皆さまに多くご参加いただくことができました。

2020年度感染症研究開発ELSIプログラム 課題一覧

課題名	代表者	所属	役職
①感染症の研究開発に資する倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する調査			
新興感染症流行時の未承認薬利用と研究開発に対する市民の態度に関する研究	中田 はる佳	国立がん研究センター	室長
COVID-19重症呼吸不全におけるECMO再配分に対する市民・社会の理解に関する実態調査	吉田 雅幸	東京医科歯科大学	教授
②感染流行時の適切な情報発信に資するリスクコミュニケーションに関する調査			
「新しい生活様式」の具現化に向けたコミュニケーション・デザイン調査研究	西井 正造	横浜市立大学	助教
不適切なリスクコミュニケーションの析出に基づく適切なリスクコミュニケーションの探究：SNS事例分析と質問紙調査	三浦 麻子	大阪大学	教授

連携セッションのポスター



【詳細】https://www.amed.go.jp/content/000088498.pdf

医療研究開発への患者・市民参画(PPI :Patient and Public Involvement)

AMED では、医学研究・臨床試験プロセスの一環として、研究者が患者さんや市民の方々の知見を参考にする「医療研究開発への患者・市民参画（PPI）」の取り組みを推進しています。この取り組みにより、患者さんなどにとってより役に立つ研究成果の創出や研究の円滑な実施、被験者保護の強化が期待されます。そのため、公募要領などを通じて、研究者や研究機関に対して PPI に積極的に取り組むようお願いをしており、徐々にその取り組みが広がりつつあります。

PPIの事例とその重要性

臨床試験計画段階からのPPI

今後のケアを患者と医師が早めに話し合うことを促進する支援プログラムの開発

国立研究開発法人 国立がん研究センター
がん対策研究所 室長
藤森 麻衣子 さん

患者さんが治療早期から終末期の療養について医師と話し合うことで、その後の高い QOL* が期待されます。そこで AMED の支援を受け、膵がんの患者さん・ご家族と医師の話し合いを促進するためのコミュニケーション支援プログラムの開発、有効性評価のための臨床試験を行いました。その際、研究班の一員として患者支援団体代表の方にも参画していただきました。患者さん・ご家族、医師へのインタビューを通じて、それまでは資料をお渡しするだけの支援から、医師からの声掛けをきっかけに資料を用いて話し合う支援プログラムとなりました。試験の説明の仕方、評価指標や時期など有効性評価についても、患者さん・ご家族と一緒に検討しました。さらに、支持療法、緩和治療、心のケアの臨床研究グループ「J-SUPPORT」による研究の意義や科学性の審査の際にも、研究者・医療者とともに患者さんや市民の方から意見をいただきました。このような PPI のプロセスのおかげで、試験への患者さんの参加率は高く、本プログラムがコミュニケーションを促進するという結果を得ました。今後、本プログラムが全国に普及するよう取り組みます。

＊QOL=Quality of Life（人生・生活の質）の略

患者の視点から

PPIの重要性と今後の課題

一般社団法人 全国がん患者団体連合会 理事長
一般社団法人 グループ・ネクサス・ジャパン 理事長
天野 慎介 さん

2018 年 3 月に閣議決定された国の「第 3 期がん対策推進基本計画」では、「AMED は、海外の研究体制と同様、我が国でも患者やがん経験者が研究のデザインや評価に参画できる体制を構築する」とされ、これを契機として国内でも様々な研究で PPI が拡がりつつあります。研究者が目指す研究のアウトカムと、患者が希望するアウトカムは必ずしも一致するものではないので、研究において何を目指すべきか、PPIを通じて研究に患者の声を反映させることが求められています。一方で、PPI は、患者や市民が一方的に自身の意見や考えを伝えるものではなく、研究者もそれらの意見や考えを一方的にすべて取り入れなければならないということではありません。PPI は、研究者と患者の対話の過程であり、相互理解の過程でもありますので、患者や市民が研究について理解を深めることも必要です。また、PPI における対話の過程では、共通言語も必要です。PPI に関わる方を対象に、共通言語としての医学や研究に関わる基礎的な知識を知っていただくためのプログラムや、研究者も医学や研究に関わる情報や言葉をわかりやすく伝える努力が求められています。

研究機関・医療機関からの PPIの取り組みレポート

順天堂大学医学部附属順天堂医院

臨床研究・治験センター
飛田 護邦 さん

順天堂大学医学部附属順天堂医院は、希少・難病疾患から有病率の高い疾患まで数多くの患者さんが来院され、首都圏最大規模の臨床プラットフォームを形成しています。また、新しい医薬品や医療機器などの研究開発も積極的に取り組んでおり、臨床研究中核病院として充実した研究支援体制を整備しています。当院臨床研究・治験センターでは、医学研究・臨床試験における患者・市民参画（PPI）の取り組みを促進するため、Hospital Social Responsibility（HSR）ユニットを設置し、一般市民向けの教育セミナーを企画するだけでなく、患者・市民の多様な意見を取り入れた臨床試験の実現を目指しています。

順天堂大学医学部附属順天堂医院 臨床研究・治験センター ウェブサイト「研究への患者・市民参画(PPI)」
https://www.juntendo.ac.jp/jcrtc/about/results-of-activity/ppi.html

順天堂大学医学部附属順天堂医院 臨床研究・治験センター ウェブサイト
https://www.juntendo.ac.jp/jcrtc/

北海道大学病院

医療・ヘルスサイエンス研究開発機構
渡邊 祐介 さん

北海道大学病院 医療・ヘルスサイエンス研究開発機構では、医療職・非医療職 6 名、学外有識者および一般の方 5 名からなるチームで PPI プロジェクトを立ち上げ、活動を始めています。PPI 活動の基盤が国内で確立していないなか、患者・市民の目線を有する機構内の非医療職新入職員に協力を仰ぎ、レクチャーと説明同意文書に関するグループディスカッションを含む PPI ワークショップを実施しました。

今後は、昨今注目を集める DCT*（分散型治験）も視野に入れ、文理融合研究としても活動をさらに発展させていきたいと考えています。

＊DCT= Decentralized Clinical Trials の略

北海道大学病院 医療・ヘルスサイエンス研究開発機構 ウェブサイト
https://helios.huhp.hokudai.ac.jp/

理事長企画座談会

社会と共に創る明日の医療

患者・市民参画（PPI）に関する調査をはじめ、黎明期より取り組みを支えてくださる４名の有識者を迎え、AMED「社会共創」への期待など、思いの丈を語っていただきました。

「社会共創」の部署が始動

三島良直理事長　今日はAMED「研究への患者･市民参画（PPI）」の取り組みで、先の調査に委員や協力者としてご尽力いただいた有識者の皆さんにお集まりいただきました。

　まず、AMEDが「社会共創」に関する新組織を設けたのでご紹介し、皆さんと「社会と共に創る明日の医療」をテーマにお話しできればと思います。

勝井恵子課長代理　2021年10月1日、従来の研究公正・法務課を改組し、「研究公正・社会共創課」を設置しました。主に3つの業務、①医療分野の研究開発等における倫理的・法的・社会的課題（ELSI）への対応、②患者・市民参画をはじめとするダイバーシティの推進、③持続可能な開発目標（SDGs）への対応を、「社会共創（Social Co-Creation）」の取り組みとして推進します。

　この取り組みにより、国民の皆さまの理解・信頼を得ながら、社会の真のニーズに基づく研究開発と成果創出をAMED全体で進めていきたいと考えています。

武藤香織さん　2015年にAMEDが設立される前から、「ELSIを考える共通の場の創設」や「PPIを日本で本格的に導入」を願っていたので、恒常的にELSIやPPIについて検討できる場を設置してくださったことは感無量です。

藤原康弘さん　素晴らしい組織がつくられたと思います。今後は何をやるかに傾注していってほしいと思います。

西村由希子さん　私は希少疾患・難治性疾患の領域で活動していますが、どの疾患も患者数が少なく、薬や治療法が乏しいため、患者がマイノリティであることを感じやすい状況があります。そうした中、新たな組織が研究開発の窓口になってくれるのではと期待しています。大事な一歩目だと思います。

桜井なおみさん　私はがんの領域で活動していますが､AMEDの部署名から「法務」という私たちにとって距離を感じてしまう印象の表現が消え、「社会共創課」が誕生したことに変化を感じます。「社会共創」に携わってきた方々がこつこつ道を拓いてくださったのだと、とても嬉しく思っています。

AMED「PPIガイドブック」から国内で広がったPPIの取り組み

三島理事長　AMEDは、「臨床研究等における患者・市民参画に関する動向調査」（2017年7月～2019年3月）を実施し、有識者委員会の委員長を藤原さん、副委員長を武藤さんが務めてくださり、AMEDにおけるPPIの基本的な考え方や、国内初のPPI専門書とされるガイドブックを作成することができました。それ以降、皆さんがPPIに関してどのような取り組みをしてこられたか、教えてください。

藤原さん　調査終了後、理事長に就任した医薬品医療機器総合機構（PMDA）で、調査経験を踏まえて、PMDAに「患者参画検討ワーキンググループ」を設置しました。PMDAの業務はもっぱら製薬企業や厚生労働省に対するもので、患者の皆さんとの接点がほぼありません。そこでPMDAとしてPPIに向けて何ができるか改めてみんなで考え、2021年9月に「患者参画ガイダンス」を発表し、患者参画によりPMDAの“Patient First”を具現化していくことなどを定めました。今は患者参画活動をさらに展開していこうとしているところです。

武藤さん　ガイドブックの完成前に、様々なご意見をいただきましたが、熱烈な応援と拒絶と無関心という感じで、ガイドブックを出せた後は、しばらく力尽

きていました（笑）。その後、AMEDで研究班を設けていただき活動しています。反響としては、積極的にガイドブックを活用されている研究グループもあれば、置いてきぼり感を抱いたという患者さんもおられます。1つの成果物をつくったことにより、発展的なミッションが多く出てきたと捉えており、それらに取り組んでいるところです。

桜井さん　ガイドブックが出て以降、全国のがん患者団体から「研究に患者の視点は重要」と共感をいただいたり、研究グループから「研究の進め方が適切か見てほしい」と相談をいただいたり、がんの領域では確かな進展が見られます。私たち全国がん患者団体連合会でも、部活動的なPPIの委員会を立ち上げ、患者の皆さんが「研究者への自分の発言はあれでよかっただろうか」などと考えを深めています。AMEDのガイドブックやPMDAのガイダンスを読み込んで、勉強しています。

西村さん　私は、AMED事業で「希少・難治性疾患患者の価値と学びをゲノム医療研究開発に活かす対話型ワークショップの設計および展開」という課題を実施しました。活動で改めて感じたのは、希少疾患・難治性疾患の領域では、患者さんたちのライフステージも、治療法の有無の状況も様々あって、一括りにできないということです。これは研究者の側にもいえることです。ただ、AMEDがPPIの基本的な考え方などをお示しになったことで、研究者たちの目線が少しずつ揃い始めたとも感じています。患者、研究者、そして行政や企業、いずれもPPIに対する今後の打ち手を考えていくことが求められているのだと思います。

言葉、患者さんとの関わり方、PPI普及に向けた課題は多い

三島理事長　成果や実感をお聞きできて嬉しいです。さらに今後、PPIを普及させていくには、どのようなことが課題となるでしょうか。

藤原さん　研究や行政などで使われている言葉が、患者さんを含む社会の多くの人に理解されていない点は課題ですね。コロナ禍では、「治験」や「特例承認」といった用語が社会でもよく出まわっていますが、メディアや医師も含め、きちんと使われていない状況が明らかになりました。平たい言葉で多くの方々に医療のことをいかに理解してもらうかが重要だと思っています。用語を「通訳」して伝えるような取り組みにAMEDの支援があると、そういった言葉への理解も増えていくのではないでしょうか。

西村さん　患者側の立場からすると、「患者のために（for）」と「患者とともに（with）」という考え方が両方あることが明確になっていくといいなと思います。「ために」もあってしかるべきですが、「ともに」も重要で、患者・市民参画はまさにこの考えに沿ったものといえます。AMEDが研究課題を公募するときも、患者さんたちの関わり方としてどういうことを求めているのかが明らかになっていると、研究者たちにも患者さんたちにもよいのだろうと思います。

桜井さん　人の考え方や見方が異なることを知ることは、大きな発見があり、とても重要なことだと思います。私はがん経験者でもありますが、「治療を受けていた時期があった」という感覚を持ちます。長い“ペイシェント・ジャーニー”の中で、患者がいつの時期にどのような

1人ひとりに寄り添い、その「3つのLIFE（生命・生活・人生）」を支えながら、
医療分野の研究成果を一刻も早く実用化し、患者さんやご家族の元に届けるために

AMEDにおける患者・市民参画（PPI）の取り組み

【公式webサイト】
https://www.amed.go.jp/ppi/index.html

・AMEDにおける定義

医学研究・臨床試験プロセスの一環として、研究者が患者・市民の知見を参考にすること

・理念（AMEDがPPIの推進によって目指すこと）

- 患者等にとってより役に立つ研究成果の創出
- 円滑な医学研究・臨床試験の実現
- 被験者保護の強化（リスク低減）

動画（YouTube）
「研究への患者・市民参画」

2017年度

・医療分野研究開発推進計画
（2017年2月17日一部変更）
被験者や患者との「連携」から「参画」へ

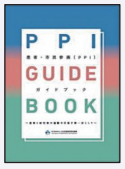
2017-18年度

「臨床研究等における患者・市民参画に関する動向調査」
国内のPPIに関連する有識者からの意見聴取
国内・海外におけるPPIの取り組みに関する実態把握

2018年度

2019年度

患者・市民参画（PPI）ガイドブック
～患者と研究者の協働を目指す第一歩として～
2019年4月公開



- A3版（見開き）／A4版（タブレット端末向け）
- テキスト版 ※（視覚障害のある方向け）
- 英語版

2020年度

事前評価への患者・市民の立場を代表する方の参画
（感染症研究開発ELSIプログラム）
（難治性疾患実用化研究事業）

2021年度

2021年10月
「社会共創」を担当する部署の設置
（研究公正・社会共創課）

・2019年度以降のAMEDの取り組み

- 公募要領に「医学研究・臨床試験における患者・市民参画（PPI）の推進」を掲載
- 研究開発提案書および成果報告書に、PPIの取り組みに関する任意記載欄を設置
- PPIの取り組みに関する事務処理の方法整備
- AMED役職員を対象としたPPIに関する業務研修
- 患者・市民参画（PPI）に関連する事業・プログラムの実施

AMED「社会共創」の取り組みに期待すること

治療を受けていたかは多様です。がんになってからまだ間もない患者の考え方と、晩期を迎えた患者の考え方にも当然ながら違いはあるので、研究への参画ではそうした多様な患者たちの経験や見方をうまくミックスできると、新しいものが生まれてくるのではないかと考えています。異なる人どうしでの対話がないといけませんね。

AMED による「社会共創」の取り組みへの期待

三島理事長　これからの AMED の「社会共創」の取り組みにどのようなことを期待しているか、ぜひお聞きしたいと思います。

桜井さん　AMED が PPI の一環で開いている研究成果報告会などでも、一方向的なプレゼンテーション形式よりも、対話を重視した座談会形式が増えていくと、携わる人たちどうしでの理解がより深まると思います。プレゼンテーション形式では、参加している方のお顔は見えても、どのような思いを持って研究をしているかは知り得ないということもあるので、人と人がもっと話をできるような会になるといいですね。

西村さん　たしかにプレゼンテーション形式だと、本音で語り合うようなことは少ないですよね。個人の意見を求められたり、所属組織は別ながら同じ仕事をしている人どうしが話したりするときに、盛り上がるものだと思います。人と人が対話を深め合うという点では、サイエンスコミュニケーターに加えて、ファシリテーターの役割がもっと社会にあってもいいのにと思っています。議論の場で自分の立場から主張するというのも大事ですが、人びとの議論が深まることをフラットに支援するファシリテーターの活躍の機会は、AMED の「社会共創」がカバーする分野ではまだ少ない気がします。課題を顕在化させたり、人びとに物事をわかりやすく伝えることを考えて実践したりする人の役割が、これからの PPI や「社会共創」で重要になってくるのではないでしょうか。そうした点にも AMED に目を向けてほしいですね。

武藤さん　AMED では、たとえばがんと希少・難治性疾患とで業務が分かれていますが、研究公正・社会共創課には、AMED の各事業を横断的に俯瞰し、ELSI や PPI での課題などを見つけ出すような機能を担ってほしいと願っています。そのためには、この課に権限を与えることも必要でしょうし、また三島理事長と直接コミュニケーションできるようになっていることも必要でしょう。研究公正・社会共創課のアドバイザリーボードのような形で、三島理事長や藤原先生、それに患者の立場の方が参加なさるというのもよいと思います。どんな組織にもいえることですが、ELSI や PPI に対して前向きな人がいる一方で、後ろ向きな人もいます。まず AMED の中から ELSI や PPI を定着化させる努力をしていただきたいと望んでいます。

藤原さん　私も PMDA を率いる立場ですが、やはりトップの役割は大きいと感じています。AMED も PMDA も、職員はだいたい 2 ～ 3 年で異動し、なかなかノウハウが蓄積されません。ある時は「社会共創」への理解が進んでも、人が代わるとまた理解度が落ちてしまう。AMED では職員だけでなく、プログラムディレクター（PD）、プログラムスーパーバイザー（PS）、プログラムオフィサー（PO）の方々もおられ、やはり「社会共創」や PPI への理解度はまちまちでしょう。その方々に「トップとしてこういう方向性を考えている」ということを、常に伝える必要があるのだと思います。

もう 1 つ、「情報の透明性」も求められていると思います。コロナ禍以降、PMDA を含む世界 35 カ国の規制当局の長がワクチンや治療薬の承認の仕方などを情報交換する遠隔会議を定期的に行っていますが、私が参加して感じるのは、各国の“Transparency and Trust”（透明性と信頼）への意識です。米国では、審議会の様子をリアルタイムで画像公開もしています。PPI についても同様ではないでしょうか。審議会も資料もすべて公開にして、そこでの判断や結果を社会のみんなで共有していくようになることが必要だと思います。情報の透明性があってこそ、社会の人びとからの信頼は得られるということを、PPI でも共通認識にしていくことが求められていると感じます。

三島理事長　今日は皆さんから様々なご期待やご提案をいただくことができました。ELSI や PPI など、「社会共創」の取り組みをしっかりと進めていきたいと、強く思ったところです。どうもありがとうございました。

（感染症対策のため、写真撮影以外はマスクを着用いたしました。）

持続可能な開発目標(SDGs) への貢献

2015 年 9 月、「国連持続可能な開発サミット」が開催され、その成果文書として「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」が採択されました。「持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals)」は 17 の目標と 169 のターゲットから成り立ちます。

AMED におけるすべての事業は、目標 3「すべての人に健康と福祉を」の達成に向けた取り組みですが、同時に、他の目標の達成にも貢献できるよう目指しています。

今後も「社会共創」の取り組みの一環として、AMED 全体で 2030 年の SDGs 目標達成に向けて取り組みを推進していきます。

国際連合広報センター「2030アジェンダ」：
https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/

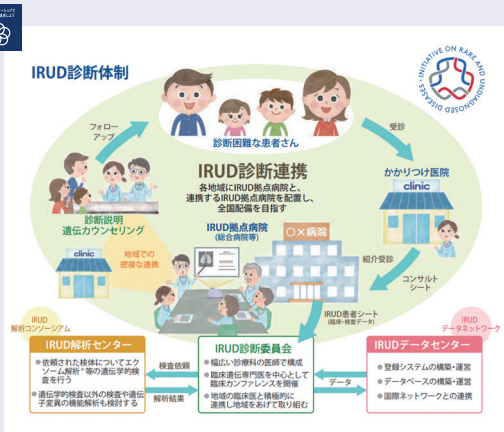
持続可能な開発目標(SDGs) 17 目標

取り組み例① “誰一人取り残さない(no one will be left behind)”を目指す活動

未診断疾患イニシアチブ(IRUD) ／難治性疾患実用化研究事業

未診断疾患イニシアチブ（IRUD：Initiative on Rare and Undiagnosed Diseases）は、通常の医療の中で診断がつかない、いわゆる「未診断疾患」の患者さんの診断を確定し、治療を見据えた病態解明やシーズ創出を目的として 2015 年から推進する研究開発プログラムです。これまで全国規模の診断体制の構築、未診断疾患の原因遺伝子の同定や疾患概念の確立、データベースの構築等を推進し、2021 年 3 月時点で 5,000 家系以上の解析を行い、その 40% 以上で診断が確定しました。AMED は、ご参加いただいている患者さん、ご家族、全国の医療機関のご協力のもと、引きつづき IRUD の研究活動を支援していきます。

【詳細】https://www.amed.go.jp/program/IRUD/

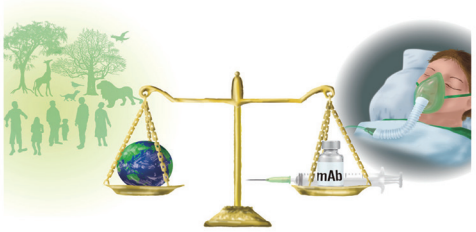


取り組み例② モノクローナル抗体のつくる責任、つかう責任の定量化

次世代治療・診断実現のための創薬基盤技術開発事業

東京大学大学院工学系研究科の天沢逸里助教、Badr Sara 特任助教、杉山弘和教授らは、次世代バイオ医薬品製造技術研究組合と共同で、モノクローナル抗体医薬品について、培養工程からの環境影響と治療による健康効果を定量的に評価しました。その結果、あるモノクローナル抗体の健康効果は、環境影響に伴う健康被害の約 10^7 倍であることがわかりました。本研究は、SDGs「つくる責任つかう責任」（目標 12）の達成に向けて、モノクローナル抗体を対象に、環境影響と健康効果を一つの枠組みで議論し、定量評価したものとして位置づけられます。

【詳細】https://www.amed.go.jp/news/release_20211015.html



"Cost-Benefit Analysis of Monoclonal Antibody Cultivation Scenarios in Terms of Life Cycle Environmental Impact and Operating Cost"
Eri Amasawa,Hiroaki Kuroda, Kozue Okamura, Sara Badr, and Hirokazu Sugiyama
ACS Sustainable Chemistry & Engineering 2021, 9(42), 14012-14021

AMED「社会共創」の推進に向けて

2017 年 4 月の入職以来、医療研究開発の事業を担当する傍ら、人文科学系の専門性を活かし、ELSI や PPI に関する業務に従事してきました。今回、「社会共創」の立ち上げに至ったことは望外の喜びであると同時に、担当としてより一層の責任を感じています。

「社会共創」という名前には、2 つの意味を込めています。1 つ目は「社会と共に創る」です。患者さんにとってより役に立つ成果を生み出すには、社会における多種多様な「知」と、それらを活用するための「協働」がますます重要になると考えます。2 つ目は「社会を共に創る」で、新しい社会や価値の創造に私たちはどのような貢献ができるのか、SDGs などを手がかりに考えを深めていきたいと思います。

奇しくも「社会共創」の立ち上げ直後、とある病気が見つかり、先日治療が一段落しました。無事に職場復帰しましたが、患者経験は実際になってみないとわからないことの連続でした。一方、あらゆる状態の患者さんを 24 時間懸命に支える医療チームの姿や、普段の診療から信頼関係を築き、手術前後も大きな安心を与えてくれた主治医の手のぬくもりから、医療研究開発の一端を担う者として大切にすべきことを教えていただいたように思います。そして、お世話になった診断法や治療法、医薬品や医療機器などは、悠久の歴史のなか、研究者や医療者、患者さんなど、多くの人々の「知」や「経験」、「想い」のリレーにより生み出され今日に至るという事実に、私自身は次の社会に何を残せるのかということを真剣に考える契機にもなりました。

「社会共創」の推進に向けて、努力を重ねていく所存です。

AMED 研究公正・社会共創課
課長代理
勝井 恵子

AMED Pickup INFORMATION

AMEDは、医療研究開発から創出される成果をより大きなものにし、患者さんやその家族に迅速に届けることを目指し、設立以来、研究の質の向上や研究に集中していただける環境づくりに取り組んできました。
AMEDの最新情報については、以下のWEBサイトをご覧ください。

AMEDの基本情報、各事業概要、最新の研究開発成果などについては、 AMED ホームページ https://www.amed.go.jp/ をご覧ください。

AMEDの事業などに関連する情報

公募情報

AMEDが行っている事業の公募情報を掲載しています。各情報は、特定の用語から検索する「キーワード検索」や、条件を選択して検索する「絞り込み検索」をはじめ、予告、公募、採択の掲載日順一覧、また、分野別・部署別に事業を分類した一覧もあります。ぜひご活用ください。

https://www.amed.go.jp/koubo/

事業手続きについて

委託研究開発契約および補助事業の事務手続きについて、事務処理説明書・様式集を掲載しています。

https://www.amed.go.jp/keiri/

AMED研究開発課題データベース（AMED find）

AMEDの助成により行われた研究開発課題の課題名、研究者、研究機関、対象疾患、開発フェーズ（開発段階）や成果情報が検索できます。

https://amedfind.amed.go.jp/

知的財産・実用化支援の取り組み

AMEDでは、研究成果の活用・導出を目指し、成果の実用化につなげる取り組み、知的財産権を確実に保護するための取り組みや活用、スタートアップ企業などに対する支援を行っています。

https://www.amed.go.jp/chitekizaisan/

AMEDについてもっと詳しく知りたい方は

AMEDメール配信サービス

AMEDでは、公募やイベント開催に関する情報を、電子メールにてご希望の皆さまにお送りする「メール配信サービス」を行っています。ご希望の方は「メール配信サービス登録フォーム」よりご登録をお願いいたします。

https://www.amed.go.jp/pr/mailmagazine.html

AMEDチャンネル（YouTube）

AMEDに関する情報を公式の動画チャンネルにおいて提供しています。シンポジウムや報告会、事業の公募や事業の手続きに関する説明会などの動画などを紹介しています。
また、最近ではCOVID-19に関する研究開発の成果なども紹介しています。

発行年月／令和４年３月
編集発行／国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED） 経営企画部評価・広報課
〒100-0004 東京都千代田区大手町 1-7-1 読売新聞ビル 24 階　TEL: 03-6870-2245　Email: contact@amed.go.jp　URL: https://www.amed.go.jp